

無量壽經論註に説示される

智斷具足に關する二つの見解

藤 堂 恭 俊

曇鸞は無量壽經論の「世尊我一心歸命」なる發願の一偈における、「世尊」について注解を加えて

「世尊者諸仏通号。論智則義無不達。諸斷則習氣無余。智斷具足能利世間爲世尊重」と言つてゐる。この曇鸞の註解に対する理解において、京學者の面には概ねふたとありの見解があるようである。即ち良忠の撰述にかかる論註記を細釈せる聖聰の註記見聞によれば

「凡仏有智斷思三德。今釈即三德具舉。論智至不達智德。諸斷至無余斷德也。智斷具足下思德也。此三德中智斷仏自行德。思德化他德也。」

と言ひ、智斷思の三德に配釈し、以てその理解を示してゐる。然るに同じく良忠の論註記を細釈せる良栄の註記見聞においては、

「合權實二智爲智德。斷人法二障所得智故約人法二執斷盡立斷德名。斷德圓滿時於淨理境無不智。仏智圓滿故是云智德也。此二德俱自利也。次思德者大悲爲體。是利他德也。此智斷二但表裏有也。斷二執斷德圓滿是表也。斷德圓滿智德圓滿是裏也。」

と言つてゐる。即ちこの細釈は聖聰の細釈と同じようであるが、恩徳が論註のどの箇所に相当するかについて指摘してないので、其だ不明瞭な点がある。私は少し無理な勝手な理解かも知れないが、この良栄の細釈は智断恩の三徳と言う範疇を先づもつて用意して置きたがらも、聖聰のこころみたごとく配釈することなく、智断二徳の表裏關係を強調し、それらが恩徳の利他なるに反し自利なることを示したものと理解してみたのである。

かかる理解が許容されるとするならば、聖聰と良栄とは論註記の細釈にあたつて異つた見解を示してゐることが知られる。しかし前者はともに、論註記の撰者良忠が触れなかつたところの——智断恩の三徳を以て、理解における基本的範疇であるかの如き立場を示してゐる点で機を一にしてゐる。これら兩つの見解のなか、聖聰の見解は、

「問文意如何。答拳仏三徳也。謂論智弄七字智徳也。諸断弄七字断徳也。智断弄八字恩徳也」と言ふ道光の論註要鈔卷上に示される見解、及び同じく道光の撰述に帰せられる論註拾遺鈔卷上に示される

「論智弄者此嘆智徳即報身也。諸断弄者此依断徳顯云身理。能利世者恩徳円満即応身也。三身三徳究竟円満即所尊境。故云世尊。」  
 と言ふ見解<sup>(5)</sup>において、既に彼に先立つて発表されてゐるところのものである。

これら二派の見解に對し、後世の宗學者はいかなる見解を示したのであろうか。先づ松譽崋的はその看、略論安樂淨土義詳解卷下において、

「仏智断具足者。智断恩三徳之中ニ也。」

と言ひ、又淨土往生論精華集の看者佐秀はその卷一において、智断恩の三徳をもつて配釈<sup>(7)</sup>し、

浄土論註研機鈔の香書買洲は、その巻上において三徳に配叙することを認容しつつ、その辨叙を拾遺抄にゆづつてける。<sup>(8)</sup>しかるに雲洞はその論註正義巻上において「是只明二徳四滿相」と言い、「是明智断思三徳四滿相。而其前據不可考せ」と言う<sup>(9)</sup>ごとく、三徳に配叙することを否認する立場に立つてゐる。

(1) 論註巻上 浄全 / 220. a-r

なお畧論安樂浄土義に「仏智断具足如法而照。法無量故照亦無量」浄全(671. a. o)と云う如く、同じく智断の二徳を示している。

(2) 巻上三、浄全 / 369. a.

(3) 一 浄全 / 457. a-r.

(4) 浄全 / 569. a.

(5) 浄全 / 607. b.

(6) 続浄 5. 33. a.

(7) 続浄 2. 148. a-r.

(8) 続浄 2. 461. a.

(9) 続浄 2. 396. a.

既にのべたようは宗學の展開、少くとも論註解説の尸史の上に見出される両つの見解に対する是非を裁断するには、先づもつて是非を決する基準を示して置かねばならない。即ち私の意図するところは、論註の解説をいかに正しく、曇鸞の立場に立つて行うかと言ふ点に存するのであるから、今の場合、曇鸞自身に智斷思の三徳なる概念が存していたか、否かが同題の焦點を構成する。従つて曇鸞の上に三徳の概念が存したか、否かによつて是非を裁断したいと思う。

そもそも智斷思の三徳は眞諦三藏の訳出諸論に散見するところであり、

甚だ寡陋ながらかの三藏以前の訳出諸經論において三徳の存することを知らない。年代的に言つて北齊の初なお生存していたと言われる曇鸞と、陳代の眞諦とは甚だ接近しているのであるが、眞諦の訳出諸論を曇鸞が使用した跡は一つも見出すことが出来ないから、曇鸞自身に智斷思の三徳なる概念が存在しなかつたものと判断をくださなければならぬ。然りとするならば三徳に配賦する道光、聖聰以下の理解は、一応理解の進展、深化を示すものであるとしても、私の意図する曇鸞の立場に立つて論註の解説を把握すると言ふ運動からは、その非なることが指摘されなければならぬところのものである。言いかえれば、道光、聖聰等の註解者にとつて、智斷思三徳なる概念は既成のものであつたに拘らず、当の曇鸞にとつては未知の概念であり、曇鸞にややおくれて訳出された攝大乘論世親（つ）等（つ）に説かれる三徳説をもつて理解すると言ふことは、時代錯誤的理解と言わなければならぬ。

次に良榮の説はともかく、三徳に配釈することの非を指摘せる雲洞は、淨影慧遠の大義章卷  
 才に「仏徳詮、衆所唯二種。一菩提行徳。二菩提契斷徳」と説示せられる仏徳の二種を紹介して  
 いるから、これに基づいて三徳配釈の非なることを強調したのではなからうか。従つて雲洞の説  
 において、「曇鸞はいかなるテキストに導かれ、智斷二徳を説示したのであらうか」と言う問に  
 討する解答を見出すことは出来ない。かくの如き状態であるから雲洞は論註の文を素直に読解す  
 ることによつて、曇鸞が智斷二徳を説示せるものなることを指摘し得たのであり、彼のこの説は  
 、仏徳は智斷思の三種によつてのみあらわされるものでなく、菩提行徳・菩提契斷徳の二種をもつ  
 てあらわすこととあるのであらうから、三徳配釈の非を表明したまでのことで、その根拠は薄弱な  
 ものと云わなければならぬ。従つて雲洞の詮索は、曇鸞がいかなる漢訳諸經論に導かれて、智  
 斷の二徳説を表明するに至つたかと言う処まで追められていない矣、卓越せる見解でありながら  
 満足出来ないものである。

(1) a. 論曰。爲徳一切智智。釈曰。即是一切智無畏。此三句即顯三徳。初明斷徳。次明思徳。

後明智徳。(廣大衆論世親釈卷才八釈心知入勝相 正藏 30. 207. 8)

論曰。由三身尊至。具相無上覺。一切法他疑。能除我頂礼。釈曰。此偈明一切相最勝

智。三身即是三徳。法身是斷徳。化身是思徳。化身是思徳。由三身故。至具三徳相果

。(下略) (同石卷十四釈智差別勝相 正藏 30. 257. C)

c. 四攝四者。即是加行。由加行故。得四四攝。及果四攝。因四攝者。謂攝慧行。果四攝  
 者。謂智斷思徳。(仏性論卷才二顯体分三田品 正藏 30. 794. A)



(2) 註の参照

正藏 十卷 〇. (雲洞の論註正義 Ⅱ 統淨 2. 396. 8.)

なお注意すべきことは、真諦の訳出經論を参照引用せる実跡を持つ愚意ですら、今の場合の如く仏德を二種としてゐるのである。

## 二

しからは曇鸞はいかなるテキストに基いて智斷の二德を表明したのであるうか。先づオ一にテキストは曇鸞に先立つて訳出されてゐると言うこと、オ二には北魏の仏教界において使用された、吾しくは使用されたと推定しうるテキストであると言う、二つの条件を具備したテキストを訪問しなればならない。私はこれら兩つの条件を具備せるテキストとして、北京曇無讖の訳出にかかる菩薩瓔珞經をあつた。この經が先にあつた二条件を具備せる点についての究明は、紙数の限定もあることであるし、別に論述したものもあるから省略することにする。即ち同卷オ三、菩薩瓔持方便処無上菩提品オ七に

「云何爲菩提。略說二種斷二種智。是名菩提。二種斷者。煩惱障斷。及智障斷。二種智者。煩惱障。離垢清淨一切煩惱不相統智。及智障斷。一切所知無障礙智。」

と云つてゐるように、智斷についてそれぞれ二種を説示してゐるのである。この智斷具備せる菩提を全つせるものこそ神であると考えた曇鸞は、この智斷を取つて、「世尊」を註解したものと

推察することが出来る。なおこの菩薩地持經の異訳である菩薩善戒經は、劉宋の求那跋摩の訳出にかかるとして、曇鸞に先立つて訳出されたテキストではあるが、北魏仏教界にとつて有縁であるが、否かと言う点では、曇無讖訳本よりも疎であると言わなければならぬ。今この求那跋摩訳本において、地持經の相当箇所を調査してみると、善戒經の卷才三、菩薩地菩提品に、「菩提者、謂二種解脫。二種智慧」と訳されており、斷智とは訳されていない。このことは曇鸞の基くところのテキストが善戒經でないことを、みづから物語るべきでない。

かくして論註に見出される惡趣諸衆の一つである智斷の經賢的根拠を探索し未つたのであるが、このよつな基礎的作業を怠るところに、曇鸞が悪いもしない智斷惡の三徳による解釈が公然と行われるようになるのである。このような論註において行われるべき基礎的作業はまだ多く存するのであるが、それらは他の機会にゆづりたいと思ふ。

(1) 曇無讖訳出經典と北魏仏教、乃至曇鸞との関係については、拙稿「淨土教における中觀、瑜伽の交渉」オノ、2の附セクレモンを参照すべし。——東洋學論叢所収——

(2) 正藏 30. 901. 8

なお菩薩地持經は言うまでもなく瑜伽師地論菩薩地の異訳であるから、玄奘訳瑜伽師地論卷才三十八、菩提品、(正藏 30. 498. C.)を参照すべし。

(3) 正藏 30. 975. C.

(一九五四、五、八記)